

善庵隨筆

下

庫文閣内	
二二函一五架	三五九二册
	和書類



内閣文庫	
番號	和 31592
冊數	2 (2)
函號	212 264

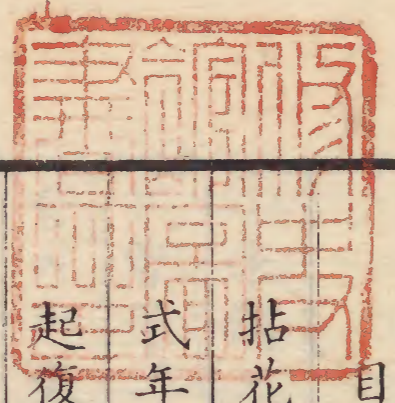
史七三



関中

善庵隨筆卷二

目錄



拈花

隅田川

式年

摩摩母

起復

服忌

求肥

研皮

羊羹

鳴立澤

俗名

僧姓

二八蕎麥

ケンドン

肥人書

薩人書

國名稱州

大尺小尺

天狗

善庵隨筆 卷二 目錄

又王安石八見シトテ、僧史誓古略卷四ニ、引梅溪集云、荆公

謂蔣山建康佛慧泉禪師曰、世尊拈花、迦葉微笑、頃在翰苑、偶

見大梵天王問佛決疑經三卷、有云、梵王在靈山會上、以金色

波羅華獻佛、請佛說法、世尊登座、拈華示衆、人天百萬、悉皆罔

措、獨迦葉破顏微笑、世尊曰、吾有正法眼藏、涅槃妙心、分付迦

葉トアリ人天眼目卷五ニ、引宗門雜錄云、王荊公問佛慧泉

禪師云、禪家所謂世尊拈花出在何典、泉云、藏經亦

不載、公曰、余頃在翰苑、偶見大梵天王問佛決疑經三卷、因閱

之、經文所載甚詳、梵王至靈山、以金色波羅華獻佛、舍身為床

座、請佛為衆生說法、世尊登座、拈花示衆、人天百萬、悉皆罔措

獨有金色頭陀、破顏微笑、世尊云、吾有正法眼藏、涅槃妙心、實

相無相、分付摩訶大迦葉、此經多談帝王事、佛請問、所

以秘藏、世無聞者、ト誓古略ニ依テイフニ似タリ、余王梅

溪集ヲ反覆閱スルニ、絶テ影響モナシ、又山菴雜錄卷下ニ、

明善韓先生書、陸放翁普燈錄敘草後云、放翁先生手書普燈

錄、敘草本、報恩、淨上人之所藏也、余故有先生遺文二帙、其間

誤處、皆手自塗了、傳燈言、世尊舉華、迦葉一笑、今講者以為經

無此事、詆其忘傳、或曰、金陵王丞相於秘省、得梵王決疑經、閱

之、有此語、有所避諱、故經不入藏、今先生以為書之、木葉旁行

之間、不知即丞相之所見、以否、其言如此、必有所考矣、併書其

後云、夫二先生學廣、理明、其言豈妄、近翰林宗公、為余敘應酬

錄、亦曰、予觀大梵天王問佛決疑經、所載拈花云云、宋公既親

觀之、則此經世必有之、而或者詆以為妄、前云、有所避諱、故不

入藏、斯言盡矣トアルモ、宋學士集ニ、應酬錄ノ敘見ヘズ、蓋

シ王安石宋景濂ノ二公ニ托メ、信ヲ世ニ取ント欲セルニ
テ、實ニ二公ニコノコトアリトハ思ハレズ、コレゾ彼徒ノ
杜撰トイフベシ、故ニ濟北集卷十八ニ、智證大師、教相同異
曰、禪宗、教相如何、答、唯以金剛般若維摩經、而為所依、以即心
是佛、而為宗、以心無所著、而為業、以諸法空、而為義、始自佛世、
衣鉢授受、師師相承、更無異途、嗚呼、珍公何、不思自語相乖哉、
已言自佛世、衣鉢授受、師師相承、何還、以維摩金剛、為所依乎、
因諸宗各有所依、將以為禪門亦有所依乎、蓋三論者、依中百
門也、法相者、依楞伽深密及唯識也、天台者、依法華也、賢首者、
依華嚴也、此諸宗、依於經論者、宜矣、何者、像法、諸師、取經論意、

而立宗也、我禪門、不然、如來命、飲光傳、心印、爾來師師、衣鉢授
受、以為法言、何暇、求所依、而取金剛維摩乎、若有所依、非佛心
宗、珍公不聽禪宗、比擬諸宗、臆度分別、出所依者、實可笑也、云
云ト論セリ、況ヤ今世ニ所傳ノ大梵天王問佛決疑經ハ、大
天王問佛決疑經、全軸二十四品、分為二本、云、是陸奧國南部
花卷玉鳳山瑞興寺、無著靈光禪師、所秘藏本也ト、享保十二
年丁未仲夏、靈光所誌、凡例十件ヲ附シ、享保二十年乙卯閏
三月、尾張國、鷲頭山長壽禪寺、東澧道解ノ後序アリ、或曰、相
傳、斯經所珍藏、本邦有三所、其一、奥州平泉光堂、經秀、衛廟處、其
二、濃州郡上郡長瀧村長瀧寺、古、其、三、攝州水田三寶寺、忍能
者、為、洞、宗、靈、光、所、傳、者、光、堂、本、也、云、文、義、淺、薄、ニ、メ、西、土、人、ノ、偽、作、マ、テ、モ、十、久、
邦人ノ涅槃經ニ依偽造シ、台嶺慈覺大師、曾自大唐抄來、在
某國某寺、ナド、附會セシニテ、信用スベカラス、此經ノ偽

造ナル一ハ、空華隨筆ニ論ジアリシ歟ト覺ユ、併攷スベシ
○隅田川ハ紀ノ國ニモ、駿河ノ國ニモ、下總ノ國ニモア
リテ、何レモ和歌ノ名所ナリ、紀伊ノ隅田川ハ伊都郡ナル
待乳山下ノ、待乳川ノ一ニテ、其源ハ大和ノ國、葛城山ヨリ
出テ、北隅田ノ庄ヲ流レテ、紀ノ川ニ落レバ、待乳山ヲ隅田
川ニ詠合スルハ、左モアルベシ、駿河ノ角田川ハ、清見寺ノ
西ニアル、今ハ旗打川トイヘル川ニテ、此邊ハ庵原郡ニ屬
シ、イト海近キユヘ、庵原崎トイフヲ、略メ庵崎トモ、磯崎ト
モイヘバ、庵崎ハ駿河ノ角田川ニ限リタル名所ナリ、然ル
ヲ辨基法師ノ地理不案内ノ上カラ、待乳山夕越乃ハ庵崎

の角田川系よ、ひとりうもゆんトコノ歌井蛙抄ニハ、紀伊

ト、紀伊モ駿河モ、混同メアヤマレルヲ、本歌トシ、都人ノ居

ナガラ名所ヲ知リ顔スルヨリ、角田川トサヘイヘバ、待乳

山モ庵崎モ、アルベキハヅノ様ニ思ヒテ、ソレト定ムベキ

地モナキニ、待乳山ヤ庵崎ヲ、角田川ノ景物ニメ、詠合スレ

バ、後人其歌ニ本ヅキ、コレゾ待乳山ナリ、庵崎ナリナド、名

所舊跡ヲ、杜撰附會スルコトニハナリシ、

○白樂天ノ謠曲ニ、孝謙天皇の御宇かよ、大和の國、高天

寺ふらむ人の、志さるの春は頃、新橋の柳ふ花の、来りては

勢とすけバ、初陽毎朝来不遭還本橋とわく、文字ヲ寫シ

乞以見まば、三十一字の証の云ふありたり、初陽の
 毎小ハ来まとも、何てどうも、もとの極みや、さえの
 るとトアル、此あさ年ノ字、古人モ明解ナク、字形近似セル
 ヨリ、或年ノ誤寫ニモアラン、ナドイフ説モアリテ、義ニ害
 ナケレバ、知レザルコトニテ、濟ミ來リツルガ、先年予ガ門
 人大森快庵ヨリ、朝鮮人ノ畫幅ニ、甲子式年、槐陰長契圖ト
 題スルヲ以テ、予ニ鑒定ヲ乞ヒ、且其解ヲ求シニ、予尺牘ニ
 テ、甲子歲開場取士是其常式故曰式年云々ト答へ遣ハシ
 ケルハ、一時ノ臆説ニメ、別ニ所證ハナカリシガ、其後小雲
 棲稿ヲ讀シニ、卷十二、與成士執科舉問答ノ條ニ問、玄川云、

小科則以子午卯酉間三年取二百人名式年トアレバ、甲子
 ハ常式ニ、及第ノアル歲ユヘニ、式年トイヒシコト明白ナ
 リ、本邦モ古ヘ及第ノアル歲ヲバ、ヤハリ式年ト、朝鮮語ヲ
 用ヒテイヒシニヤ、及第ノアル歲ハ、國子生ナト、一同勉學
 シ、誦讀ノ聲、日夜不絶ヨリ、勸學院ノ雀ハ、蒙求ヲ轉ル、夕ト
 ヘノ意ヲ以テ、驚ナトモ歌ヲ詠ズ、トイハシタメニ、式年ト
 ハ書シニヤアラン、

○生母ニアラズメ、子ヲ養育スル母ヲ、マ、母トイヒ、生子
 ニアラズメ、養育ヲ受ル子ヲ、マ、子トイフ、マ、ハ養育ノ
 義ニテ、小兒ニ乳ヲ飲付スル、今ノ乳母ノ事ナリ、コレヲ古

へ、乳付ケトイフ、東鑑ニ、武衛頼朝卿乳付ケノ青女ヲ召サ
ル、摩摩ト號ス、トアルニテ知ルベシ、コレヨリ轉稱メ、小兒
ノ乳ヲ飲ムヲ、マ、ト云ヒ、今ニテハ小兒ノ飯ヲ喫スルヲ、
モマ、ト云フニハナリシ、

附洛東隱士慈延ノ隣女晤言卷二ニ、蓬生卷よ、こまゝの
おたまひとちりりもつりと云々、又浮舟卷よ、まゝと
いへるところ、三ところぢりり、細流小乳母の若乃
中う小釋しぬるハたうへも、也是軒の拙小、おたまと
ハ、まゝとをへてなぐくるといへるとかゝる、
さうしてハ物語の中ふても、すえのときさう流あり、又陸

奥玉羽の方ふてハ、とけ世も、乳母ととゞく、まゝとよふ
かり、古治の流るるハいかうふまゝ之、雅語あり流とも、
さう樂流軽云ふ、そのが妻はハ、おんかとも、とよぶハむ
う、都ふて、妻と女どもと、人ふ對してハ、いひひなるべ
し、おんも陸奥玉羽などけ人ハ、おん人ふむうひてハ、と
のが妻とゆんなどりといへる、

○起復ハ正禮ニ非ズ、止ムコトヲ得ザルニ起ルナリ、故ニ
石林過庭録ニ、至和間、富鄭公爲相、以母喪去位、時久無以宰
相持喪者、昭陵意大向公必欲起復、詔再下、再力辭、上以盧朱
崖薛文惠故事、切責有云、以相國之尊、而守匹夫之節、任天下

之重、而爲門內之私、朕所不取也、且命中人督公起、非同就道、不得先還、公復抗章言、天下無事、宰相奉行常務、豈可與大宗時比、中書樞密院臣僚韓琦等、平居皆嘗與臣論起復、不是好事、今在嫌疑之地、必不肯爲臣盡言、惟斷自聖意、上知其不可奪乃已、トアリテ、皆然ルヘキコトナリニ、漢書翟方進爲丞相、遭後母憂、既葬三十六日、除服起視事、以爲身備漢相、不敢踰國家之制、注師古曰、漢制自文帝遺詔之後、國家遵以爲常、大功十五日、小功十四日、緦麻七日、方進自以大臣、故云不敢踰制、トアリテ、強起就職、ノ日限マテ、上ヨリ定メアリ、故ニ出仕スルニ、朝服ヲ異ニメ、情ヲ表スルナリ、朝野雜記ニ、故

事大臣奪情者、服慥光、幘紫袍、皂革帶、道君惡之、政和末、始議、以入公門、不應變服、遂以吉服朝、然居家猶喪服也、紹興初、朱藏一起復、右僕射請所服、太常援政和近事爲請、而居第則慘服去佩焉、議者不以爲是、孝宗之喪、趙子真當國、始令群臣服白涼衫、皂帶以治事、逮終喪乃止、論者以爲是、及光宗之喪、禮部侍郎陳宗召復、請百官以日易月、禫除畢、服紫衫、皂帶以治事、從之、及ヒ談錄ニ、李宗諤云、先公周顯德末、翰林學士起復、裹素紗、軟脚幘頭、黥紫公服、每入朝、猶佩魚袋、或曰、魚袋者、取事君夙夜匪懈之義、然以金爲飾、亦身之華也、居喪奪情、不當有金銀之飾、公遽謝不敏、ナドノ禮制アリ、五代史ニ、鄭慶

餘嘗採唐土庶吉凶書疏之式、雜以當時家人之禮、為書儀兩卷、明宗見其起復之制、歎曰、儒者所以隆孝悌而敦風俗、且無金革之事、起復可乎、トハアリガタキコトナリ、余本朝忌免ノコトニ感ズルユヘ、此ニ鈔シ出シヌ、本朝ノコトハ別ニ論ズ、

○皇朝ノ古ヘ律令格式等、何事モ唐ノ制ヲ遵用セラレシコトナルニ、獨リ服紀令ノミ、凡服紀者、為父母及夫、本主、一年、祖父母、養父母、五月、曾祖父母、外祖父母、伯叔姑妻、兄弟、姊妹、夫之父、嫡子、三月、高祖父母、舅姨、嫡母、繼母、繼父、同居、異父兄弟、姊妹、衆子、嫡孫、一月、衆孫、從父兄弟、姊妹、兄弟子、七日ト、

一年五月三月一月七日ノ五等ニ、服紀ヲ建ラレシハ、唐土

古今ニ其制ヲ見聞セズ、皇朝ノ創制ナルニヤ、若シヤ三韓

ナドノ法ヲ用ヒシコトモアラシク歟ナド疑ヒシニ、東國通

鑑卷十高麗紀、成宗文懿王乙酉四年宋雍熙二年冬十月、新定五服

給暇式、斬衰齊衰三年、給百日、齊衰期年、給三十日、大功九月、

給二十日、小功五月、給十五日、總麻三月、給七日トアリ、暇ハ

休暇ノ暇ニメ奉公ヲ免シ、家居メ喪ヲ行フノ暇ヲ給フヲ

給暇ト云フ、神祇服紀令ニ、暇俗號荒忌トイヘバ、今日所云

ノ忌ノ一ニテ、忌トイフ稱ハ、神祇服紀令ヨリ出シ詞ナル

ベシ、拾芥抄ニ假寧令ヲ引テ凡職事官、遭父母喪、竝解官、自

餘皆給暇夫及祖父母養父母外祖父母卅日三月服卅日一月服十日七日服三日ト云今ノ令ハ養父母巳下ノ二十四字ヲ脱ス補フベシ塙氏校刻本ニハ此二十四字アリコノ文ニヨレバ父母ノ喪ハ竝ニ解官メ給暇ノナク一年ノ服ヲ受ケシム尤モ本生父母ニ限ルトニメ養父母ハコノ例ニアラズコレ先王以孝治天下萬代不易ノ難有制度ナラズヤ法曹至要鈔ニ假寧令說者云問僧尼遭父及餘親喪何處分答於僧尼不見給暇法於父母無疑矣トアルト僧尼ハ世外ノ人トイヘドモ服紀爲父母一年ナルト疑ヒナシ給暇ノ法ハ不見トアルニテ父母ニ給暇ノナキト知

ルベシ今ノ服忌令ニ父母忌五十日トアルハ先王ノ令ニハナキトナリ何レノ代誰人ノ立テシ法ナルヤ文保記永正記ナドニ父母并夫暇五十日十三个月トアレバソノ時代巳ニ專ハラ行ハルコト思ハル令ニ祖父母養父母暇三十日服三個月九十ナレバ本生父母ニ暇ノナキ理ハアルマシ本生ノ父母ハ養父母ヨリ一等重クメ暇五十日ニテ相當ナルベシナド心得違メカク杜撰セシニヤアラシ高麗ノ制ハ五服ヲ建テ暇ヲ給ヒ暇モ亦本朝ト異同スルハ蓋其損益スル所ナラン但シ成宗ノ四年乙酉ハ宋ノ雍熙二年ニメ皇朝花山天皇ノ寛和元年ニ當リ文武天

皇ノ元年令律修撰、既訖施行天下セシヨリ、二百八十五年ノ後ナレバ、高麗反テ皇朝ノ制ヲ受ルニ似タリ、コトニ新建トアレバ、コレヨリ前高麗ニ、此式ナキヲ知ルベシ、

○菓子ニ名ヅクル、牛ノ皮ニ似タレバトテ、牛ノ皮トイヒ、羊ノ肝ニ似タレバトテ、羊肝トイフ、古人ノ純素樸率、思ヒヤルベシ、後人ノ物忌ヒスル心ヨリ、文字ノ不潔ナルヲ嫌ヒ、牛皮ヲ求肥、石川文山

紀聞卷一、詩教ニ云、京ヨリ到來トテ、牛皮飴ノ篋ヲ手ヅカラ出メ、華人ナラハ幾クノ詩賦カアラシカ、桑城ニハ未ダ詩ヲキカズ、何サマ案ノ見ルベシトテ、一笑シヌ私ノ云、牛皮ノ字ヲサヘ忌テ、近來求肥トカク位デハ、詩ハゴザアルマジトイヘバ、翁、筆の周ぎ英老上よ云く、松風、といふ菓子とみ心の傍侶ハ、嚇嚇タリトアリ、犬皮ヲ研皮

犬皮ト唱ム、牛皮ハひらへら名カクベシ、女ノ字ト忌テ、今ハ研皮ト作ス、或人云く、見肥ノ字ハハカバよけんト、羊肝ヲ羊羹ト、音ヲ假テ、文字ヲ易ヘ、其實ヲ失フニ至ル、

附 犬皮ヲ松風ト名ヅクルワケハ、橘庵漫筆卷四ニ云ク、

干菓子ノ松風ハ、初免系都より製し出し、或法方江流流とをまきりし、清覧有テ、松風と號給ム、其心ハ、表小犬の別態一跡泡立し、けしとゆふなど、いろくの斐あきど、うらハ鏡目として、摸振かく、うら寂愛あふよりて、松風とハ名付け給つりと、

○西行ノ鴨立澤ノ歌ハ、モト澤邊ニ鴨ノ立テル、秋ノ夕暮ノイト淋シク、物哀レナルサマヲ詠セシ、實景ノ歌ニメ、鴨

廻小雜記一卷、一名宗祇回國記と号して、亦本巻小分
ち、法源杜多の序文を附と、大不潔まり、こゝにハ准后道興
の書作あり、文中を考へてあまゝトイヘド、余ハ准后
道興ノ作トイフ説モ、覺東ナク覺フ、其時代ヨリハ、後ノ
物ト思ハル、

○今ノ俗名トイヘルモノ、吾日本ニテ古ヘ字トイフモノ
ニ當ル、萬葉集第十六本朝世記奥羽軍記等ニ載スル所證
スヘシ、本朝世記、康治二年記曰、六月十三日戊戌、源賴
盛字檜垣三郎、源惟正字、辻三郎、忽企合戰云云、中古
文政行ハレシヨリ、縉紳家モ文アレハ、漢土ニ擬メ名ノ外
ニ字トイフモノ出來ス左レトモ爵位官職ト、實名ニテ通

用スレバ、人毎ニ字アルニモ非ズ、好事ノ上ヨリ、私ニ文詞
上ニ稱セシマデナリ、故ニ鎌倉時代ノ頃マデハ、民間ニテ
ヤハリ今ノ俗名ヲ字ト稱セシテ、古文書等ニ毎毎見ユ、慶
元以來、文人學士ハ、必ズ俗名ノ外ニ、唐人同様ニ字アルト
ナレバ、今更ニ古ノ例ヲ用ヒテ、俗名ヲ字トモイヒガタシ、
左レバトテ、俗名俗稱ノ字ハ、和漢トモ所見ナシ、因テタゞ
稱□□□□ト書キタラバ、當リサワリ無カルベシ又漢土ニ
小字トイフモノアリ、今古奇觀ニ小名、宋金郎、官名、宋金ト
アリ、官名トハ公邊ニ用フル、表向ノ名ニテ、實名トイフカ
如シ、小名トハ民間ニ呼習ハシタル、平生ノ通名ナリ、コレ

證トスルニ、足ルヤフナレドモ、他書ニ載スル小名小字ハ、大抵幼少ノ時ノ子供、名ナリ、又侍兒小名録ニ載スル小名ハ、此方ノ人、夕トヘバ家ニ居ルトキノ名、女子ナレバ阿松トカ、阿梅トカイヘルカ、諸侯方ニ奉公スレバ別ニ名ヲ賜テ尾上トカ、岩藤トカ改ム、ソノ奉公中ノ名ヲ小名トイフカク一定セザレバ一ヲ取テ證トシ用ヒカタシ、

○僧ノ姓ヲスヘテ釋トイフコトハ、道安ヨリ始マル、開元録云、秦晉已前出家者、多隨師姓、後彌天沙門道安云、凡剃髮、洗、衣、紹釋迦種、即無殊姓、空悉稱釋氏、時皆未然、追譯出阿舍經、云佛告比丘、四大河水入海、無復本名、同名為海、四姓之子

於佛出家、剃除鬚髮、著三法衣、無復本姓、但云沙門釋子、增一經卷二十一、佛言、今有四大河從阿耨達泉出、為四、所謂恆河、新頭婆、又、私陀、四河入海、無復本名、俱名為海、四姓出家、言釋子、トアルニテ知ルベシ、

○蕎麥ハ冷物ユヘ、脾胃虛弱ノ人ニ空シカラ子ハ、大小二麥ト一樣ニ常食ニ充ツベキ物ニ非ス、シカシ土ノ肥瘠ヲ論セズ一候七十五日ニメ實熟シ、凶荒ノ備ニハ甚便空ナル故ニ、天工開物云、蕎麥實、非麥類、然其為粉、療饑、傳名、為麥、則麥之而已、續日本書紀ニ養老六年七月戊子、詔曰、今夏無雨、苗稼不登、空令天下國司、勸課百姓、種樹晚禾、蕎麥及大小麥、藏置儲積、以備年荒、又續日本後紀ニ、承和六年正月七日、令畿内國司、勸種蕎麥、以其所

生土地、不論沃瘠、收穫只在秋中、稻粱之外、足爲食也、ナドアリテ、先王天下ノ國司ヲメ、百姓ニ勸種セシメ給ヘバ、其後トテモ、諸國ニテ蕎麥ヲ種テ、凶荒ニ備ヘ、二麥ノ助トナセシカト、其頃ハ蕎麥搔餅カキモチ又ハ蕎麥燒餅ヤキモチニ作メ、食料ニ充シニテ、今ノ蕎麥切ナトヤフイ物ハナカリシニ、鹽尻ニそば切ハ、甲州あづまめて天目山あまめへ集法多うりし時、而の氏集法の法人小食と賣りしふ、末妻とくなくりしゆへ、そばと福りてもことせし、その後うごんと學びて、今のそば切とハなりしトアルニテ見レバ、最初ハ蕎麥搔餅カキモチ或ハ蕎麥燒餅ヤキモチニ製メ、旅籠トセシガ、後ニハ溫鈍ニナラヒテ、湯餅ト作セシト

ナリ、西土ニテモ、農政全書ニ、王楨カ農書ヲ引テ曰ク、北方山後諸郡多種、治去皮殼磨而爲麩、焦作煎餅、配蒜而食、和名鈔、或作湯餅、謂之河漏、滑細如粉、亞于麥麩、トイフ、焦作煎餅、配蒜食之、ハコレ蕎麥燒餅ナリ、或作湯餅、謂之河漏、ハコレ溫鈍ニナラヒテ、湯ニ入レテ、コレヲ煮ルモノニメ、即チ蕎麥切ナリ、但シ溫鈍ノ如キハ、湯餅ト作メ食フベケレド、蕎麥ハ湯ニ入テ煮レバ、切切ニナリテ、片ヲナスベカラズ、因テ思フ當時二ハ蕎麥ト云テ、蕎麥粉二分、溫鈍粉八分、八分ト二分トノ調合ニスルハ、溫鈍粉ヲ多クメ、切レザルヤフニセシニヤアラン、
今ノ人二八トイフハ、價ノコトニテ、今蕎麥一膳ヲ十六文ニ賣ルユヘニ、二八

十六文ノ義ト心得ルハ誤ナリ、其頃ハ未タ諸品下直ユヘ
 蕎麥ノ價モ十六文ニテハアルマジ、還魂紙料ニ寛文八年
 ノ頃、江戸ノ流行物ヲ集メシ、短歌ヲ載テ、八文りりのけん
 どんや又かゝるに男よ、頭停耘年一杯六文のけりむ
 とば切麻の子もむ一年榊本蒸糝むは切一搦七文
 トアルニテモ、當時蕎麥一膳ノ價十六文ニアラサルヲ知
 ルベカク二八ノ調合ニテハ、温鈍ニ近久、蕎麥タル詮ナケ
 レハトテ、新ニ蒸蕎麥トイフモノヲ工夫ス、其製法ハ蕎麥
 粉ヲ冷水ニテ、ヨク浚合セ、麩棒ニテ按擗ゲ、フタ、ビ棒ニ
 捲テ、連ニ打ツコト、數遍熨メ薄片トナルヲ、剉メ線トナシ、
 沸湯ニ入テ煤上ケ、冷水ニテ洗ヒ、フタ、ビ蒸籠ニ入レ、蒸
 メ露氣ナカラシメ、煎和ノ醬油ヲ以テ、大根ノ絞汁ワサビ山葵海
 苔等ヲ配メ食フ、西土ノ河漏ハイカ、製スルヤ、此方ノ蒸

麥トハ同ジカラザルヤフニ思ハル、此方ニテハ、温鈍モ蕎
 麥切モ、モト菓子屋ニ屬メ、菓子屋ニテハ、船切重詰ニメ、賣リ
 シユヘニ、菓子屋ノ杜氏トウジハ、必ラズ蕎麥ヲ打ツ筈ノモノナ
 リ、今ニコレヲ以テ、杜氏ノ巧拙ヲ試ルハ、昔ノ餘風ノ存セ
 ルナルヨシ聞及ヘリ、寛文ノ頃、ケンドン温鈍、盛ニ行スレ
 シユヘ、蕎麥モ温鈍ニナラヒテ、ケンドンニセシナリ、ケン
 ドントハ、俗ニ生質温和ニメ、財利ニコセツカザル者ヲ、オ
 ントウトイフ、オントウト、ウインドント、音ノ近キヲ以テ、此
 ウインドンハ、ウインドンナラデ、ケンドンナリトイフ意ニテ、
 一杯盛切ニメ、カハリヲ出サズ、給使モセザルヨリ、ケンド

ントハイヒシ、コレヲ便利ナリトテ賞翫シ下下ノ者トリ
 ハヤシ、盛ニ行ハレシヨリ、温鈍屋蕎麥屋ナドイフモノ逐
 逐ニ出來又、故ニ昔昔物語ニ寛文辰年、四けんどんとは切
 とりの物出來て、下々買喰ふ者人ふハ喰者かトアリテ、
 用捨箱ニ、昔ハ温鈍乃りれて温鈍の旁ハ蕎麥切と賣る今
 ハ蕎麥切堅小なりて、三傍ハ温鈍と賣る、けんどん屋とい
 ふハ、寛文中より^三けんどんとも、蕎麥屋といふハ、近々享保の頃
 までもなトイヘリ、

○中古小學問ノ有シハ、民間僞用ノ爲ニ、皇國人ノ字音五
 十字ヲ、唐國ノ楷書點畫少ク、或ハ點畫ノ中ニテ、點畫ヲ省

キ、畫少ク書易キ様ニ制シ、國音ノ五十音ヲ寫シ取り、譬へ
 ハ天ヲアメ、地ヲツチ、凡、山海風雨ノ類文字有ラシメ、是ヲ
 肥人書ト名ク、仁和寺書目ニ、肥人書五卷トアリ、蓋シ肥ノ
 國ニ古ヨリ傳フル所ノ文字ナリ、纔ニ五卷ニテ天下ノ字
 音盡スヘカラスト雖モ、是ヲ以テ例セハ、皇國ノ言葉ハ盡
 スベシ、今ノ字引節用ノ如ク、只義理ニ拘ラズ、文字ノ連續
 ヲ教フルノミ、故ニ五卷ニシテ足レリ、釋日本紀ニ、大藏省
 御書ノ中ニ、肥人ノ字六七枚許リアリ、先帝令寫給其字、皆
 用假名、或、其字未明乃川等字明見之ト云リ、今考ルニ乃川
 ノ二字、片假名ノ外ニ存スルモノナシ、是レ肥人書ハ片假

名ナルノ證據ナリ、故ニ是ヲ肥人書ト云ナレバ、萬葉集十
 一卷ニ、肥人ヲ高麗ト釋セリ、肥ト高麗トハ、南北一帯ノ海
 ヲ隔ルノミニテ、皇國人ノ高麗ニ住シ、高麗人ノ皇國ニ歸
 化在住ノモノ多シ、高麗國ニテハ、唐國ト久シク朝聘往來
 シテ、上下凡唐國ノ文字ヲ、知リタルモノ多ケレバ歸化ノ
 人ノ中ニテ、唐國ノ字ヲ五十音ニ製作シテ、日用ニ便利セ
 ントテ、教ヘタルナルベシ、去ナカラ、夫ハ國音五十字ニ寫
 シ取ノミニテ字ニ義ノナキトハ、西洋ノアベセテト一様
 ナリ、又古來ヨリ相傳フルノ説ニ、片假名ハ皇國ノ楷書、薩
 人書ハ皇國ノ草書ト云ル説ノナキトハ云ベカラズ、薩人

書ハ國音ヲ四十七字ニウツシ取、今ノ平假名ナルベシ、義
 ハ肥人書ト同用ニシテ、字ニ義ハ無リシヲ、吉備大臣五十
 音ヲ、唇舌牙齒喉ノ五音ニ分テ、十行ニシテ、輕重清濁、天下
 ノ字音、縱橫錯綜シテ、盡ガルトナキ様ニナシ、玉フハ、吉備
 公ノ可謂神智、いろははモ、弘法大師四十七字ノ國字ヲ以テ
 長歌トナシ、いろはははほへとちりぬるを、わかよたれとつ
 ねならむ、うゑのねくやまけふこほて、あささゆめみゝ忽
 ひもせすト、誦讀ニ便ナラシムルハ、大師ノ所爲ナリ、是ヲ
 タトヘハ、唐國ニテ梁武帝ノ頃、王羲之ノ書、一字或ハ二字
 錯雜混亂メ、次序ナカリシヲ、周興嗣ニ命セラレ、次韻セシ

メテ、千字文トナシ、人ヲメ誦讀シ易カラシム、是ト同様ノ例ナリ、

○吾六十六箇國ヲ西土ノ州ニ擬メ、武藏ヲ武州、攝津ヲ攝州トイフノ類ハ、皆文人一時ノ隨筆ニ出デ、其稱ヲ雅ニシ唐メカサントスル迄ニメ、刺史牧伯ナト、同ジクモトヨリ官ヨリ建ラレシ、定稱ニアラサレハ、六國史ハ勿論正史等ニ、スヘテ此稱ナシ、サレバ文人ノ稱スル所モ、己カ隨意一樣ナラザル也、故ニ今但馬ヲ但州トイフナルヲ、馬州ト稱シ美濃ヲ濃州トイフナルヲ、美州ト稱セシハ、夏山雜談ニ、本朝文粹ヲ引テ云ヘリ、
夏山雜談卷五ニ、今ハ但州ト書テ、昔ハ馬州ト書タルニヤ、

本朝文粹ニ、山井中納言但馬國ニ流サレテ、才ハセシカ、歸京ヲユルサレムト請ヒ給ヒシ狀ニ云、嗚呼昔侍鳳闕、已爲羽翼之臣、今在馬州、長爲芻蕘之士、云云、又今ハ濃州ト書テ、美州ト書タルニヤ、大江匡衡朝臣ノ、美濃守源賴光朝臣ニ報スル書ノ宛所ニ、謹上美州刺史硯下、ト見ヘタリ、

卷ニ載スル、贈陸奥德一菩薩書ニ、陸州德一菩薩法前謹空、

トアルハ、今イフ奥州ナリ、日蓮ノ録内御書ト云ヘル書ニハ、今イフ房州ヲ安州日蓮ト書キ、鹽尻ニ小鼻廣林ノ張州年中行事ト云フ書ヲ引用ス、今尾州トイフナルヲ、張州ト書ケリ、コレニテ其定稱ナキヲ推知スヘシ、サレド今ハ關東ニテ、官ニモ州ノ稱ヲ用ヒ給フ様ニ思ハルレト、流俗ニ從テ稱セララル、ニテ、睨ト制度ニ建シニハアラシ、

○西土ノ人ハ瑣細ノ事迄モ何カレトナク、記載シ、餘ス所ナキ様ナレト、文ニ過テ反テ實ヲ失フノ弊アリ、邦俗ハ文不足メ傳フヘキヲモ、傳ヘザルノ弊アリトイヘトモ、朴實善ヲ守ルヨリ、反テ古ヲ存シ、考證ノ資ケトナルヲアルナリ、今一事ヲ舉テイハ、吾邦古ヘ唐制ニ倣ヒ、尺ニ大小ノ二様アリ、大尺ノ一步ハ五尺、小尺ノ一步ハ六尺、コレ五尺六尺ト、名ヲ異ニスル迄ニテ、大尺ノ五尺ハ、小尺ノ六尺、小尺ノ六尺ハ、大尺ノ五尺ニテ、度ノ長短ニ變リハナシ、タゞ地ヲ度ル尺杖ハ、大尺ノ五尺ヲ用フルヲニメ、雜令ニ凡度地五尺ヲ爲歩トアリテ、定制ノ様ニ思ハル、ナレト、時ニ

臨デ小尺ヲ用フルヲモアルニヤ、令集解ニ和銅六年二月十九日ノ格ヲ引テ、其度地以六尺爲歩トモ見ヘタレバ、當時大小ノ二様トリ交ゼ通用スルヲナリシ、御イヘニテハ、紛ハシキ故ヲ以ニヤ、慶長年中ヨリ、槩メ小尺ノ六尺ヲ用フルヲ制度ト爲シ給ヒヌレト、昔ヨリ大尺ノ五尺ヲ以、檢地セシ所ハ、別ニ檢地帳ヲ書改ムルヲ無モ、其儘ニテ差置レ、若シ新ニ檢地スルトキハ、必ズ御定法通り、六尺一步ノ間竿ヲ用フルニゾ有リケル、然ルヲ地方懸リノ有司文字無エヘ、一步ヲ一分ト心得違シ、間竿ニ一分ノ有餘ヲ加ヘ一間六尺一分トシ、二間竿ニメ、一丈二尺二分ヲ用ヒシヨ

リ、遂ニハ御規定ノ様ニ心得今日ニ至テハ、六尺一分天下ノ制度トナリタリ、廣大ナル地面ノ上ニテ、何ノ損益アリテ、一分ヲ加ヘ給フノ理アラシヤ、六尺一步ナレバコソ、今ニ檢地帳奥書ニ、六尺壹歩之間竿ヲ以テ、壹反三百歩ノ積、御檢地相極ト書來ルヲナルヲ、或人ノ六尺一分ト書テ、指出セシト有シニ、該府ニテ壹歩ト書ク、仕來ノ法ニ相違スルトテ、歩ノ字ニ書直シ、被申付之由、故ニ縣令モ其跟官モ、何ノ故トモ知らズ、只此歩ノ字ノミニ限り、分ノ字ニ書クマシキトノ様ニ心得、堅ク先規ヲ守ルトニソ有リケル、若容易ニ分ノ字ニ書改メナハ、今日ニ在テ、誰カ六尺一步

ノ歩ナルヲ知ルベケンヤ、

○此方ニ天狗ト云ヘルモノ、西土ノ天狗ト、同名異物ナリ、混稱スベカラズ、世ニ天狗ノ所爲ト云フヲ見ルニ、變幻自在不可思議ナルトノミニメ、何物ト名狀シ難ク、魑魅魍魎ニ比スレバ、巧ナルト多クメ、其人ヲ蠱惑愚弄スル模様大ニ狐ニ髣髴タリ、因テ思フニ、太平廣記、其外歷代ノ小説類ニ多ク狐妖ノヲ載ス、狐ニモ天狐白狐玄狐トテ、各各年數ヲ以テ差別アリ、天狐、其最古キ狐ニテ、精神ノミ存在メ形ハナシ、故ニ物ニ托メ、種々ノ奇幻ヲ爲シ、一瞬千里、風ノ如ク往來ス、此方ノ天狗モ、或ハ僧、或ハ山伏ナド、種種ニ形

ヲ幻シ、奇變ノ巧ヲ以テ、人ヲ盡惑スル、一ニ天狐ニ同シ、モ
 シヤ天狗ハ、天狐ニテハ十キヤ、世ニ天狗ト云ヒ傳フル小
 田原ノ道了權現永平寺六代通幻寂靈大和尚ノ弟子了菴
 惠明、大和尚ニ隨從セシ、發從ニ道了ト云
 フ、大力僧アリ、平生ノ行迹ニ、不思議ノ事ニ托メ試ミ給フ、十
 尚兼テ其凡人ナラザルヲ察知シ、事ニ托メ試ミ給フ、十
 トアリシカ、遂ニ生ナガラ小天狗ニ成レリト云ヒ傳フ、小
 田原記卷ニ云、永祿三年八月、足柄ノ城御普請、御巡見ノ爲
 ニ氏康御馬ヲ出サレ、御歸リニ、關本ノ最乗寺ヘ御參詣ア
 リ當寺ノ開山了菴和尚、此地ニ山居アリシヲ、大森寄栖庵
 常ニ信シ、此寺ヲ建立シケル、サレバ關東奥州マテ、此和尚
 ノ法孫トメ、諸寺悉ク當寺ノ住持ヲ勤メ、一年替リニ輪番
 ナリト、今案スルニ、了菴和尚最乗寺ヲ開基セシヨリメ、其
 後大慈院報恩院ヲ逐逐ニ開基メ、今ハ三山トナリ、又三山
 トモ輪番持ナリ、最乗寺ハ二十五ヶ寺ニテ、一年ツ、一寺
 輪番ス、昔シ道了ノ真影ハ、小天狗ノ狐ニ跨ル圖ナリシヲ、
 美濃龍泰寺某和尚輪番ノ頃、カク道徳イミジク、靈驗イチ
 ジルクオハシマシ、魔形ヲ具スルハ、然ルベカラズトテ、明

覺道了和尚ト、和尚號ヲ追贈シ、真影ヲ改メ、今ノ銅印ヲ用
 エル、トニナリシトゾ、今茲辛丑ヲ距ル、六十餘年前ノ一
 ナリト、信濃ノ飯綱權現甲斐郡内上吉田村、富士山神職、小
 開久、猿伊豫ガ家ニ、古來ヨリ所傳ノ道
 了飯綱淺間ノ三銅像アリ、飯綱モ道了ト同シク、小天狗ノ
 狐ニ跨リタル像也ト云フ、因テ思フニ、護園遺編ニ、イヅナ
 ハ信州ノ山名也、イタバキニ天狗ノ祠アル故ニ、山ノ名ヲ
 以テ、其法ニ名ヅク、其法ハ天竺ノ茶耆尼天ノ法ナリ、法ヲ
 行フニ、抹香ヲタケバ行ハレヌト、コノ茶耆尼天ノ法モ、狐
 ヲ驅役スルモノニツヤ、古今著聞集ニ、知足院殿何事小テ
 久、大権坊といひ、効驗の倍此有る事、傳り、以、教の、
 せ、大権坊といひ、効驗の倍此有る事、傳り、以、教の、
 の懇切乃、日限と、小伴、修、成、在、て、作、合、ら、け、る、に、傳、の、
 乃、七、日、法、い、ま、ま、つ、り、を、以、七、日、中、小、あ、る、一、
 若、七、日、法、い、ま、ま、つ、り、を、以、七、日、中、小、あ、る、一、
 是、小、あ、る、が、つ、り、を、以、七、日、中、小、あ、る、一、
 心、や、か、小、あ、る、が、つ、り、を、以、七、日、中、小、あ、る、一、
 初、お、こ、あ、る、が、つ、り、を、以、七、日、中、小、あ、る、一、
 い、か、お、こ、あ、る、が、つ、り、を、以、七、日、中、小、あ、る、一、

一、狐一足来り佐持等依くいりり、又よ人小抄等事、
 一、狐を後七日乃延座移ハるゝに、佛んぢる目知是院殿の
 一、乃かみりさ絲のきぬの毛塔よりも、三天計のまをりけ
 一、みふとりつうせ給ひぬ女房見りてさきつうい
 一、よかくはと中なる交けひひうやの中うまへて、世乃大
 一、くひ小つらと、天人のつまくたりたりんもかくやとおほ
 一、へさ世給て、活志のひあへさ世給て、活志と覺し覺
 一、せ給ひらると、女房つらと引ちかちてと活志ぬと覺し覺
 一、しある程ふさおらみきれ小まきり、つらとつらといさくつらま
 一、くおや、わを程ふ、い愛さぬわぬ、つらとつらといさくつらま
 一、うあして、五狐の境、一帯は、狐の尾ありあり、ふさ小の
 一、しめ、しと大撞坊を石てその中う活作せらまらつらハさま
 一、ハふそ中、い活志、いり小空、かまらまら、く、年以、履重の、
 一、多く、いつまは、毛程、小つらとつらといさくつらまら、
 一、の、子、明、日、年、刻、小、ら、な、ら、げ、叶、ひ、い、へ、し、は、と、ハ、活、罪、の、事、ハ、
 一、い、る、安、や、と、程、中、て、出、小、り、り、か、つ、く、と、く、女、房、の、装、束、一、襲、
 一、り、つ、け、給、り、り、中、て、り、如、く、次、日、年、刻、小、ら、な、ら、げ、二、び、の、子、公

一、家よ、中、さ、ま、た、り、り、り、と、地、抄、縁、外、一、帯、乃、い、ま、り、り、と、
 一、大、撞、と、ハ、る、穢、ふ、は、茶、り、り、件、の、い、さ、尾、ハ、き、り、り、り、ハ、
 一、く、ふ、か、く、お、さ、先、希、り、や、ぐ、て、ま、法、と、智、と、世、給、て、り、り、
 一、四、重、か、と、の、五、り、り、り、ハ、ま、づ、う、り、ハ、世、給、り、り、り、
 一、論、り、り、け、り、と、ど、妙、高、院、の、獲、法、殿、小、ぬ、ら、ま、り、り、り、
 一、ら、ん、ま、い、き、尾、の、外、も、又、別、の、四、本、堂、ま、り、り、り、
 一、た、と、乃、い、跡、冷、泉、洞、院、小、ら、り、り、り、
 一、り、ゆ、へ、く、い、ち、ま、た、り、り、り、後、天、沐、り、り、り、
 一、し、ま、を、お、り、り、ト、アル、下、總、ノ、阿、波、大、杉、殿、ナ、ド、ノ、真、影、ヲ、見、ル
 一、ニ、テ、推、知、ス、ベ、シ、
 一、二、少、シ、ツ、ノ、不、同、ハ、ア、レ、也、小、天、狗、ノ、狐、ニ、跨、ル、像、ナ、レ、バ、
 一、天、狗、ハ、狐、ニ、縁、故、ナ、キ、ニ、非、ズ、ト、思、ヒ、シ、ニ、日、本、書、紀、
 一、春、二、月、丙、辰、朔、戊、寅、大、星、從、東、流、西、便、有、音、
 一、之、音、亦、曰、地、雷、於、是、僧、曼、僧、曰、非、流、星、是、天、狗、也、其、吠、似、雷、
 一、ニ、大、狗、ノ、字、ヲ、ア、マ、ツ、キ、ツ、子、ト、邦、訓、ヲ、施、ス、左、ス、レ、ハ、天、狗
 一、ヲ、天、狐、ト、云、フ、ハ、必、シ、モ、余、カ、創、説、ニ、非、ズ、メ、古、人、早、ク、コ、ノ

說アリテ、キツ子トハ訓セシナラン、頃日皆川淇園ノ有
 斐齋劄記ヲ閱スルニ、野狐最モ鈍、其次氣狐、其次空狐、其次
 天狐、氣狐以上皆已無其形、而空狐其靈變更倍於氣狐、至天
 狐則神化不可測、人有爲物所役頃刻行千里外者、乃皆空狐
 之所爲、大抵離地七丈五尺、彼乃得攝之行、如天狐乃不復爲
 人害、此說善幻者話云トアリ、今此ニ言フ氣狐ハ野狐ノ人
 ヲ蠱惑メ崇ヲ作シ、人身ニ馮テ食ヲ求メ、及道士ノ驅役ス
 ル、オサキ狐ナルモノニメ、空狐ハ即天狗ナリ、彼此併攷ス
 レハ、天狗ノ狐タルヲ疑フベキナシ、

附西北域記ニ狐之族七、蒙古産者ニ毛黃而長曰草狐、短

而黠曰夜沙狐、沙狐賺曰天馬皮、領曰烏雲豹、其曰金雲豹

者、西産也、俄羅斯産者五、絨黑、而毫白曰元狐、其次身黠

黃黑毫也而賺黑曰獨刀、又其次身黠音夷黃色也而賺青曰火狐、此

外又有白狐、灰狐、土人曰是徵音空狐聲也、徵者、年老作妖、作冠

枯顛、衣擗葉、幻人形、爲害甚大、又曰、老而妖者、名狚狐、亦名

靈狐、似猫、而黑、蓋別一種云、夜譚隨録ニ云、狐之類不一、有草狐、沙狐、玄狐、火狐、白狐、灰狐、

雲狐之別、或曰、是ノ徵、徵者、年老則妖、作云云、或曰、老而妖者、名狚狐、又名靈狐、似猫、而黑、北地多有之、蓋別一種云、是
我道、而最靈者、曰皆狐、似猫、而黑、北地多有之、蓋別一種云、是
草狐ハ毛黃ニメ長ク、常ノ野狐ニメ、沙狐以下ハ物色ヲ
以テ名ヲ異ニスルノミ、タバ狚狐ハ別ノ一種ニテ、此方
ニ云フ、管狐ノ様ナレド、似猫、而黑トアレハ、亦自一種ナ
リ、管狐ハ大サ鼯鼠ホドアリテ、目豎ニ付ク、其他ハズベ
テ、野狐ニ同ジ、但毛扶疎トメ、蒙戎夕ラザルナリ、管狐ヲ

善庵隨筆卷下終

驅役スルノ術竹筒ノ管燭ニ短ク用テ後無節ノ吹キハ
 ヲトクツヨ持メ咒文ヲ誦スレバ狐忽チ管中ニ在テ所開
 ノコトヲ一告知ラスコレハモト修驗ノ道士勤行精
 修ノ後ニ金峰山ヨリメ授クル所ト云フ故ニ管狐ノ名
 アリ此狐駿遠三ノ北邊山寄ノ地ニ多シ關東ニテハ上
 毛下毛最多シ上毛ノ尾崎村ニ至テハ一村コノ狐ヲ畜
 ハザル家ナシ因テ又尾崎狐トモ云ス狼躑躅ノ對ニ
 録ニハ武州大崎トイフイヅレカ是ナルヤ

善庵隨筆卷下終
 此狐駿遠三ノ北邊山寄ノ地ニ多シ關東ニテハ上
 毛下毛最多シ上毛ノ尾崎村ニ至テハ一村コノ狐ヲ畜
 ハザル家ナシ因テ又尾崎狐トモ云ス狼躑躅ノ對ニ
 録ニハ武州大崎トイフイヅレカ是ナルヤ

善庵隨筆附錄

鄭將軍成功傳碑
 吾大東日本之人以武勇勝於萬國世所知也夫以匹夫馳勇
 名於西洋耀武威於天下者若濱田彌兵衛兄弟於臺灣山田
 仁左衛門於暹羅勇則勇矣義不知也其併勇與義而有之吾
 鄭將軍成功蓋其人乎成功初名森小字福松父芝龍後號飛
 黃將軍泉州南安縣人祖翔宇曾祖壽寰世府椽芝龍兄弟四
 人芝龍即其長次芝虎次鴻達次芝豹初芝龍以妾故失愛於
 父父怒逐之芝龍亾奔一洋船父猶罵言尋出殺之洋船又刻

善庵隨筆附錄
 鄭將軍成功傳碑
 吾大東日本之人以武勇勝於萬國世所知也夫以匹夫馳勇
 名於西洋耀武威於天下者若濱田彌兵衛兄弟於臺灣山田
 仁左衛門於暹羅勇則勇矣義不知也其併勇與義而有之吾
 鄭將軍成功蓋其人乎成功初名森小字福松父芝龍後號飛
 黃將軍泉州南安縣人祖翔宇曾祖壽寰世府椽芝龍兄弟四
 人芝龍即其長次芝虎次鴻達次芝豹初芝龍以妾故失愛於
 父父怒逐之芝龍亾奔一洋船父猶罵言尋出殺之洋船又刻

時掛帆，乃懇巨商帶往日本。時年十八，來艘返棹，芝龍留在平戶。再一年，前艘又至，及其返，芝龍亦附歸焉。至中途，為海盜所劫。海盜即顏思齊、思齊、海澄人，稱日本甲螺，率我邊民占臺灣，地與群盜分十寨保焉。思齊為之魁，至是入思齊黨。一日一寨失主，芝龍乃請一寨，且曰：若其貨物乞衆力為我放一洋，獲之，有無多寡，皆我之命。思齊許之，衆亦欣然相佐。劫四艘，貨物皆自暹羅來者，每艘約二千餘金，盡以畀芝龍。於是芝龍之富冠九寨矣。及思齊死，寨無所統，衆俱推芝龍為魁。時則通家耗輦，金還家，置蘇杭細軟兩京大內寶玩，販海外諸國。又屢往來平戶。吾先公賜宅地於千里濱，仍娶田川氏。寬永元年七月二

十三日，生成功後，又生七左衛門。於是芝龍寄貨與妻，祭以平戶為狡窟之地。五年戊辰六月，明兵部議招芝龍。七月，芝龍率所部降于督師熊文燦，以其平廣盜，征生黎，焚荷蘭，收劉香之功，任都督。從是以軍國事劇，不復得至日本矣。成功年已七歲，芝龍請母子渡海者數矣，官許遣之。母以弟猶幼，少不肯俱往。成功風儀整秀，倣儻有大志，為南安生員，讀書穎敏，不治章句。先輩王觀光一見，謂其父曰：是兒英物，非而所及也。年十五入南京大學，補弟子員，試高等，食氣二十人中，聞錢謙益名，執贄為弟子，謙益字之曰大木。金陵有術士視之，驚曰：此奇男子，骨相非凡，命世雄才，非科甲者。成功每東向而望其母，又屢致書。

以迎之。二年乙酉四月十五日，母自長崎渡海，弟七左衛門，冒母氏移住長崎。時鴻達鄭彩兵敗南還，與閣部黃道周等擁立唐王于福建，改元隆武，封芝龍為平鹵侯，鴻達定西侯，俱加太師。成功年二十二，芝龍攜之。陛見，丰采掩映，奕奕耀人。帝奇之，撫其背曰：「惜無一女，配卿，卿當盡忠，吾家無相忘也。」賜姓朱，改名成功，封御營中軍都督，賜尚方劍，儀同駙馬。自是中外稱國姓，而不名。然芝龍以擁立非己意，日與文臣忤。又度帝必不能偏安一隅，時洪承疇招撫江南，黃熙胤招撫福建，皆晉江人，與芝龍同里。通聲問，密謀歸款。成功知而患之，帝亦知芝龍不可恃，無以制之。一日成功見帝，愁坐，胸塞口咽，跪奏曰：「陛下鬱鬱」

不樂，得無以臣父有異志耶？臣受國厚恩，義無反顧，請以死扞陛下矣。」及兩浙敗，關門不戒，廷臣屢請命芝龍出關，芝龍亦知不出關，無以厭衆心，乃分兵為二，一軍以鴻達為大元帥，出浙東，一軍鄭彩為副元帥，出江右。帝築壇于郊，送之。既出關，上疏稱餉缺不行，逗留月餘。帝下詔責曰：「倘畏縮不前，自有國法，乃不得已，踰關行四五百里，仍疏言餉絕，留住如故。」十二月，帝決意親征。二十九日，駐建寧。二年丙戌三月，幸延平府。五月，清兵渡錢塘。六月，封成功忠孝伯。楚撫何騰蛟、江右楊廷麟皆有疏，迎帝。帝意欲往江右，猶豫未決。是時清兵渡江，錢塘不守，芝龍微聞之，因疏稱海寇狎至，須邀備禦。今三關餉取之，臣臣取之。

海無海則無家臣非往往不可拜表即行帝手勅留之中使奉
敕至河而芝龍飛帆已過安平矣守關將施福聲言缺餉盡撤
兵還安平自芝龍去後帝決計幸贛芝龍使軍民數萬人遮道
號呼擁駕不得行芝龍因具表請回天與帝不得已駐劄延平
芝龍百計阻之欲留帝以自重焉八月清兵已出韶州抵仙霞
關仙霞嶺二百里無一守兵無一敵兵如入無人之境焉二十
一日駕發延平二十七日入汀州二十八日清兵奄至帝崩于
福州九月二十八日清兵至泉州先是芝豹至泉州閉城門大
索餉皆計鄉紳家財勒取不應立梟之抵暮得數萬金俄而清
兵至芝豹兵潰芝豹奔回安平成功母田川氏在泉州城獨不

退曰事既至此何愛一死登城樓自剄投水死成功聞之大號
慟不自勝是時芝龍尚保安平軍容烜赫水陸畢備外雖示武
而內已納款但恐以立福王為罪故猶豫未敢迎清師貝勒王
博洛仍遣芝龍所最善郭必昌而招之且囑以閩粵總督芝龍
又自恃謂先撤關兵於彼有功閩粵總兵必可得也召成功等
計事成功泣諫曰父教子以忠不聞以貳且北朝何信之有弟
姪亦不願降皆勸芝龍入海曰魚不可脫淵不聽遂進降表十
一月十五日至福州見博洛博洛握手甚歡折矢為誓命酒痛
飲三日夜半忽拔營挾以北矣從者五百人分隸各旗莫能相
見博洛召成功成功不至芝龍既行鴻達鄭彩率所部入海芝

豹奉母居安平成功雖遇主列爵未嘗預兵事意氣容貌猶儒
生也既遭國難諫父不聽且痛母死非命悲歌慷慨謀起義兵
詣孔廟焚所著儒服拜先師仰天曰昔為孺子今為孤臣向背
去留各有所用謹謝儒服庶先師昭鑒高揖而去所善陳輝張
進施琅施顯陳霸洪旭等願從者九十餘人乘二巨艦斷纜行
收兵南澳得數千人文移稱忠孝伯征討大將軍罪臣國姓十
月永明王即位于肇慶改元永曆四年丁亥成功遙奉永曆朔
提師自南澳歸泊鼓浪嶼與廈門隔一帶水廈門金門俱隸
南安為兩島時鄭彩據廈門鄭聯據金門互相犄角八月成功
與鴻逵合攻泉州敗提督趙國佐于桃花山追至城下副將王

進自漳赴援成功回島鴻逵艤舟泉港慶安元年戊子三月成
功攻同安復侵泉州八月清授芝龍為一等精奇尼哈番二年
己丑正月成功募兵于銅山三月令施琅楊才黃廷柯宸極康
明張英等攻漳浦尋下雲霄抵詔安屯分水關令黃廷柯等守
盤陀嶺清兵來攻宸極死之七月永曆封成功延平公二年庚
寅八月潮人黃海如陳斌邀成功入潮城守不可下遣甘輝殺
賊黃亮采於峽山敗粵東邵提督于潮陽兵卻乃乘流揚帆直
至廈門成功密與部下謀曰兩島吾家臥榻之側豈容人鼯睡
時方中秋聯醉臥萬石巖不迎詰朝醉醒出見成功成功曰兄
能以一軍見假乎未及對諸執銳者前矣聯唯唯而已於是麾

軍過聯船諸皆讐伏莫敢動聯亟竄入金門愬於彩彩知力不敵出避之成功弁聯軍兵勢日盛海寇之在東南者盡歸心焉承應元年壬辰八月初芝龍在彼有子五人世恩世蔭世襲世默皆成功弟也芝龍入京惟世忠從焉于是芝龍以其祖父墳墓俱在福建請留繼母及弟芝豹子世恩各一人在彼其妻妾及諸子搬取來京詔允所請仍官在京一子世忠爲二等侍衛命芝龍書諭成功及鴻逵降許赦罪授官並聽駐原地方防勦浙閩廣東寇往來洋船令管理二年癸巳五月清封芝龍同安侯成功澄海公鴻逵奉化伯芝豹在都督芝豹隨母入京成功不受封寇掠如故三年甲午六月和碩鄭親王濟爾哈朗等議

鄭芝龍請以次子世忠與成功誼切手足若今與使臣同到成功處諭以君恩責以父命巽言婉導彼必欣然向化應從所請令世忠與使臣偕往可也從之十月復遣葉阿二滿員議撫成功不從葉阿歸報遂將芝龍芝豹等俱就寧古塔正法成功不顧十二月寇漳州十邑皆下略泉州不能破而還時鄭氏兵勢方盛乃分所部爲七十二鎮立儲賢館儲材館察言司賓客司設印局軍器諸局令六官分理庶事以潘賡昌爲吏戶官陳寶鑰爲禮官張光啓爲兵官程應璠爲刑官馮澄世爲工官改中左所爲思明州以鄧會知州事奉監國魯王盧溪王寧靖王居金門凡諸宗室頗給贍之凡有所復宜封拜輒朝服北向遙拜

帝座疏而焚之。明曆元年乙未三月，福建巡撫修國器，獲鄭芝龍與其弟鴻逵子成功交通私書，以上之。十二月，芝龍僕尹大器首其父子交通狀，敕芝龍自獄中以手書招成功，成功不降。議政王貞勒大臣會議，擬寧古塔地方近江海，成功賊船無所不至。芝龍禁後，恐有疎虞，應各用鐵鍊三條，手足扭錄，命章京兵丁嚴加看守，從之。永曆遣周金湯航海，晉成功延平郡王，成功乃議大舉入寇金陵。戊戌七月，以黃廷為前提督，洪旭為兵官，鄭泰為戶官，留守，部署諸將，遂引舟師抵浙江，攻陷樂清等邑。次羊山，為暴風漂沒，八千餘人，幼子從軍，亦溺焉。泊滙洲，理檝廢然返。己亥五月十三日，成功至崇明，諸將請先取崇明為

老營，不聽。成功議曰：瓜鎮為金陵門戶，須先破之。於是率兵入寇，甲士凡十七萬，五萬習水戰，五萬習騎射，五萬習步擊，以萬人為往來策應，以萬人為鑿人，鑿人者披鑿甲，繪朱碧彪文，聳立陳前，砍馬足，最堅銳。侍郎張煌言為監軍。六月初一至初三日，蔽江而上。初八日至丹徒，十三日泊巫山，十五日先以吉服祭大祖，次以鎬服祭先帝，祭畢大呼高皇者三，將士及諸軍俱泣下。鎮江至瓜洲，江面十里，清用巨木築長壩，截斷江流，廣三丈，覆以泥，可馳馬。左右木柵有穴，可射砲石盤銃，星列江心，用圍尺大索牽接木壩兩端，以拒海舟。操江蔣國柱總兵管效忠副總高謙設兵嚴守鎮江，又于談家洲伏兵二千，列砲于上，新

操江朱衣助六月十三日到任守瓜洲十五日海舟二千三百泊焦山先遣四舟揚帆而上清兵望見大發炮石海舟近霸從容復下清兵注射砲聲晝夜不絕凡發砲五日不傷一艘海舟既上復下循環數次一以誘清兵炮矢二以水兵藏內近霸即入水斫斷十六日度砲將盡悉舟過鎮江莫有過者十七日上瓜洲從後寨殺入清兵出禦蓋東門外有高岸騎布列鄭兵立兩旁水田中斫馬足大敗之鄭將劉某乘勝直追入瓜洲城大殺將沿江砲移向談家洲擊之兵立扎不定有海兵二千忽自江中浮上持長刀亂斫洲上兵走海舟以千人追殺復移洲砲擊鎮江告急于南京南京發兵洪承疇麾下羅將軍鐵騎千人

赴援其兵鐵甲如雪大言曰這些海賊不殺吾殺欲入江勦絕常州王總鎮無錫守備張科江陰守備施某羅將軍管提督等兵共九隊凡萬五千人而馬居半京軍僑躁急欲與戰而海舟忽上忽下清兵駐南則泊于北駐北則泊于南佯爲畏避以誘之清兵隨走三日夜不息露立江邊甚疲鄭兵前一隊五色旗第二隊蜈蚣旗第三隊狼烟第四隊倭銃第五隊大刀末後又另用一人敵鼓頭上插一旗如鼓聲緩則兵行亦緩鼓聲急則兵行亦急然多步卒清兵甚輕之凡騎兵遇步卒反退數丈加鞭突前敵陣稍動即乘勢殺入步卒自相踐陷騎兵因而蹂躪以此常勝至是亦用此法馳騎突前鄭兵嚴陣當之屹然不動

俱以團牌自蔽望之如堵清兵三卻三進鄭陣如山遙見背後黑烟冉冉而起欲卻馬再衝而鄭兵疾走如飛突至馬前殺入其兵三人一伍一兵執團牌敵兩人一兵斫馬一兵斫人甚銳一刀揮鐵甲軍馬爲兩段戰良久鄭陣中一將舉白旗一揮兵卽兩開如退避狀有走不及者卽伏于地清兵望見謂其將遁可以乘勢衝擊遂馳馬直前不虞鄭陣中忽發一大炮擊死千餘餘軍驚潰鄭兵馳上截前五隊騎兵圍之大殺羅部下白先鋒郎部下王先鋒歿于陣提督管效忠率滇南換班披甲數萬分道馳之鄭兵不動用長刀砍馬銳不可當退走銀山效忠留步兵守銀山騎兵移當大路成功以銀山迫府治爲必爭之地

奪而據之陣以待明二十八日效忠復分五道三疊萃鄭壘騎射如雨成功令發大炮佐以金鼓屋瓦悉震清兵皆下馬殊死戰鄭兵益奮時鄭將列一陣效忠望見謂麾下曰此八卦陣也生門向洹宜從此攻入開門而出及入卽變爲長蛇陣擊首尾應擊尾首應遂圍效忠效忠見軍不利負旗而遁效忠馳至城濠鄭兵飛走隨至諸軍皆散效忠出兵四千僅存百四十人嘆曰吾自滿州入中國身經十七戰未有若此一陣者常州主鎮兵三百存三十七人高謙五百存八十騎入鎮江登城閉守效忠走南京而蔣國柱走丹陽鎮江守將高謙知府戴可進等降成功登峴山大饗士卒令全斌及黃昭等守鎮江澄世署道事

屬邑皆下。甘輝曰：瓜鎮爲南北咽喉，但須坐鎮於此，斷瓜洲，則山東之師不下。據北固，則兩浙之路不通。南都可不勞而定矣。不聽。竟薄金陵。郎廷佐聞鄭兵將至，將城外屋悉行燒拆。近城十里，居民俱令入城，斂兵閉守。七月八日，鄭兵至，結營白土山。距南京儀鳳門七里，以黃安總督水師守三义河口。成功由儀鳳門登陸，令諸舟一字列於江東門外，親率騎兵歷城下，度營壘，安設大砲地雷，密雲布梯，復造木柵，欲以久困之。成功與五親軍屯岳廟山，留前鋒鎮中衝鎮，屯獅子山。甘輝進曰：夫兵貴先聲，彼衆我寡，及其燭且未定，其勢空拔。若彼集禦固，緩難圖也。君必悔之。不聽。退而告人曰：吾不復此矣。十七日，清兵千

騎薄前鋒營，余新擊敗之。遂輕敵不備，縱酒爲驩。成功聞之，令張英馳讓新，猶如故。煌言與輝並亦苦諫，復不納。二十三日，夜梁化鳳由儀鳳門穴城出，銜枚疾走，復薄新營。新不及，甲倉皇出拒，尋皆遊江而走。成功聞砲聲，遣翁天祐馳援，已無及矣。二十四日，清以步兵數千直擣中堅，成功擊敗之。廷佐以騎兵數萬從山後出其背，夾攻之，猝不及備，遂大傷。成功急麾兵退，以舟邀，獨甘輝且戰且走。至江騎能屬者三十餘，凡所擊殺數千百人，馬躓被執，不屈死，最烈矣。二十五日，還鎮江。二十九日，成功議還島，使馬信韓英督舟師，堵守江口。周全斌黃昭吳豪爲後殿，餘軍次第登舟而還。八月五日，至吳淞港。九日，攻崇明，不

下棄而歸十月還島痛哭甘輝而後入曰吾早從甘輝之言不及此祠忠臣廟以輝為第一三年庚子五月清命將軍達素總督李率泰部分滿漢軍兵大船出漳州小船出同安以廣東降將為導成功以陳鵬督諸部守高崎過同安兵鄭泰出涪州過廣東兵自勒諸部扼海門一日東風盛猛一海皆動北人不諳水性眩暈不能成列成功手自褰旂引巨艦橫擊之清兵棄船登圭嶼鄭亦登攻鏖戰斬獲無算將軍達素還福州自殺於是竟成功之世無覆島者然成功以廈門單弱亟思招地適日本甲螺何斌與荷蘭會長有隙自臺灣走廈門見成功盛陳臺灣富强為四省要害且言可取狀成功大喜振舵東甲于是遂行

三月泊澎湖至鹿耳門水淺沙膠海道紆折不得入適水驟漲丈餘大小戰艦銜尾而進乃攻赤嵌城克之遂圍王城堅守不下乃環山列營以困之十月清棄芝龍於柴市鄭氏子孫在京者無少長皆伏誅十二月荷蘭窮以十餘艘決戰成功用火攻盡焚之然終無降意成功使人告之曰臺灣即先人故地當歸於我若珍寶不急之物聽汝悉載去荷蘭乃降成功既有臺灣改臺灣為安平鎮以赤嵌城為承天府總名曰東都設府二曰承天縣二曰天興曰萬年寬文二年壬寅五月成功卒年三十九時長子經出守廈門六月訃至經自稱招討大將軍嗣立領兵還臺復至廈門以翁天祐為轉運使任以廈門政三年癸卯

永曆計至，經猶奉正朔，稱永曆十七年。於是清主銳意南征，遣人約紅夷，合兵攻島。十月，耿繼茂李率泰滿帥郎賽調合紅夷舟出泉州，馬得功出同安，黃梧施琅出漳州，分道疾進。經部分死士，令全斌禦之。全斌以二十艘，往來奮擊，剽疾如飛。紅夷砲無一中者。諸軍雲翔而不敢進，得功先至，為全斌所殪。既而大軍大集，眾寡不敵，退保銅山。清兵入島，墮城而兩島之民爛焉。四年甲辰三月，改東都為東寧府，陞天興萬年二縣為州。前後招納諸省兵民，以實之。然南風不競，勢日稍蹙。猶能擁孤軍與大清相抗者十九年，大小數戰，殺傷相當，亦非義勇所能致哉。天和元年辛酉正月，經卒。年三十四，猶奉永曆正朔。佩招討

大將軍印，稱世子。長子克壘，舊為監國。克壘實非鄭氏，出本姓李。經妾竊養，以為經子。其事秘，經不知也。克壘嚴毅，頗倣成功。諸弟畏之，揚言曰：克壘非吾骨肉，一旦得志，吾屬無遺類矣。經母董氏，即命收監國印，幽諸別室。諸弟夜拉殺之。董氏立次子克塽。時年十二。六月，經母董氏卒。越二年癸亥六月，靖海將軍施琅率舟進討。自銅山抵澎湖，入罩灣。連克虎井桶盤諸嶼。克塽勢不支，決計納款。八月，詣軍門降。詔赴京師，授漢軍公。鄭氏自成功初起，迄克塽，凡三世。三十八年而明朝亡。明末之亂，清兵百萬，乘運亂入中國。當此時，世臣名家屈膝乞降，辮髮自甘，不知愧也。成功獨據孤島，存故國衣冠于海外，奉其正朔，以恢

復為狂。雖志不遂。而三十八年之久。猶保明統於不絕矣。是可
不謂義乎。又可謂勇乎。吾乾齋公勇乎。見義而為之。故以成
功。有勇有義。不愧其為日本人。命鼎作之傳。勒石於千里濱。以
存古蹟。蓋亦奉先公賜宅地之意也。謹作鄭將軍成功傳碑。

常陸 日下部翼

門人 上總 古川 政 全校

越前 有馬 峻

善庵隨筆附錄 終

跋

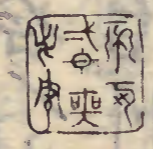
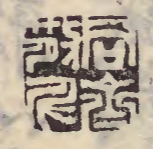
先子曰清文敏識著述盈室。夙馳名
聲於藝林。年伯德立。忽發喘疾。尔後
雖或少安。訖弗全瘳。而教授講論。兀
窮年。未嘗少廢怠。如是者。幾二十餘年
矣。戊申初夏。宿病頓熄。起行寧法。於是
治尚書典謨。將作之解。覃思研精。致搜

討駁正舊說。靡遺餘力。歲晚二典解。纔成。而病疾復動。是以其餘未竣。功亦止。然性好撰述。病間有所得。輒援筆書錄。上自古昔規制。矩度。人物稱謂。下至草野奇怪。俚諺童謠。咸有所考。正焉。命曰善庵隨筆。是小說之類。特先子之緒餘耳。然小說九百。亦居九流之一焉。古賢輔相天者也。

輯邦國下民之俚謠巷歌。以察人情。邪正。且督政令之得失。而致盛大之治。則是書不特可使學者考時尚之義。惡詳世故之變遷。以資博洽而已。於國家清明之治。不必少補也。書賈玉巖嘗請上梓。先子未及許之。而逝。頃廢。與同志校雠魯魚。為揭示題目。以便展閱。乃敢付之。若夫二典解及其他。

經說文辭。則先子苦心撰著。畢生精神。所寓。在子孫。固不可不廣其傳。然卷帙浩瀚。未易遽從事也。故先刻是書。以為之兆爾。己酉孟秋

不肖履識并書



玉巖堂製本書目

江戸横山町三丁目

和泉屋金石衛門

資治通鑑正編 宋司馬溫公編集 勢州有造館藏板 全百冊

國史纂論 太華山縣先生著 長門明倫館藏板 全十冊

- 第一帙 自序表目錄 至漢紀二十 第二帙 自漢紀二十一 至漢紀五十
- 第三帙 自漢紀五十一 至晉紀十 第四帙 自晉紀十一 至晉紀四十
- 第五帙 自宋紀一 至宋紀四 第六帙 自梁紀五 至隋紀二
- 第七帙 自隋紀三 至唐紀二十四 第八帙 自唐紀二十五 至唐紀五十四
- 第九帙 自唐紀五十五 至後梁紀三 第十帙 自後梁紀四 至後周紀五

嚴氏詩緝 宋嚴粲輯 姫路仁壽館藏板 全六冊

民政要編 太華山縣先生著 長門明倫館藏板 全三冊

荀子箋釋 朝川善庵先生校閱 子戶維新館藏版 全八冊

品字箋 近刻

合刻四書

孝經學記 片山兼山先生點
大學中庸 全一冊

孟子正文

片山兼山先生點 全三冊

周易正文

同上 全二冊

禮記正文

同上 全五冊

周禮正文

同上 全三冊

大學原本釋義

善庵朝川先生著 全一冊

趙註孟子

全四冊
後漢ノ趙岐漢明解スル處宋ノ程朱以前ニシテ別ニ見處アリ新注ヲ讀ム人マツレラ披覽セザルベカラズ

左傳凡例考

越子敬著 全一冊

客杭日記

元郭昇著 全一冊

大學原解

錦城太田先生著 全三冊

先生經學ニ大功アルハ天下ノ驚服スル所ナリソノ經解數十部アリテ此書ハ其一ナリ古今諸注家此書ヲ訂シテ先聖ノ秘蘊ヲ發明ス大學主解ノ書多ク云トモ此書ノ如キ精確ナルハナシ學者ノ最モ貴重スベキ書ナリ

中庸原解

同上 全三冊

三經談

晴軒太田先生著 全一冊

此書ハ論語孟子周易ノ疑義ヲ明ニ辨シテ學者講經ノ一助ヲラシム且錦城先生晩年ノ定説ヲモ記載スアレバ九經談ト相参考シテ最モ裨益アルノ書ナリ

論語考二編

宇上新先生著 全三冊

此書ハ經傳子史凡ソ論語ノ意ニ涉ルモノハ旁引曲証ソノ精詳ヲ極ム學者ノ考鏡ヲ資ケテ最モ裨益アルノ珍編ナリ

論語一貫

片山兼山先生著 全五冊

先生ハ近古最一ノ考証家ニシテ清朝諸大家ノ影響アリ元祿享保ノ學ヲ謬誤ヲ一洗シテ一家ノ學ヲナス儒者必讀ノ書ナリ

仁說三書

錦城太田先生著 全二冊

洙泗仁說一貫明義仁說要義三書ヲ合刻スルモ也先生數十年ノ精カヲ窮メ發明スル處アリ此書ヲ著ス故ニ其說精詳確當ニ古今未發ノ秘蘊ヲ啓クト云ベシ附錄論語ノ行文誤守等ヲ考ヘ經傳詞語異義等ノ數則ノ舉示ス學者實ニ鴻寶トスヘシ

疑問錄

太田錦城先生著 全二冊

程朱ノ學ノ大意ハ聖人ニ詭ラザレドモマ、其老佛ニ混糅スルモノハ道ヲ害スルニ近キアリ先生積年其似疑ナルモノヲ甄別シテ駁正セリ學者ニ大功アル書ニテ讀書家ニ必貯スベキ編ナリ

鳳鳴集

太田錦城先生著 全三冊

先生ノ詩集若干卷アリ此書其七絶中殊ニ佳境ト稱スル者ヲ集ム先生卓越ノ才ヲ以テ發ラザラ詩學ニ用ユ唐宋諸家ニ於テ窺ハザル處ナシ故ニ其比興深奧ニ於テ詩家ノ作外ハ大ニ其趣ヲ異ニス學者玩味シテソノ作意ノ妙ヲ知ルヘキナリ

晚唐十家絕句

館柳灣先生著 全二冊

杜牧 許渾 趙嘏 李群玉 温庭筠 薛能 皮日休 陸龜蒙 吳融 章莊 右十家ノ七言絶句ヲ集ム

先哲叢談

念齋原先生著

全四冊

蘇老泉文集

活字版

全四冊

甌北詩選

清趙翼先生著
大窪詩佛西先生閱
岡部菊厓

全二冊

蒼曝雜記

同上
天民善庵菊厓先生校

全三冊

甌北詩話

同上
天民山而先生校

全四冊

趣巖先生學問掩擲近清諸家詩話評論各
唐宋元明清朝マデノ諸名家ノ詩ヲ評論各
其履歷顛末ヲ考究シテ精詳談博トス從前
詩話ト同日ニ論ズベカラザルナリ

四王合傳

清無名氏
它山堤先生校閱

全二冊

武功紀盛

清趙翼先生著
它山堤先生校

合刻

煙草錄

清顧鐵卿著

全一冊

藝林摘葉

井良紀子網著

全一冊

音義ノ訛舛ヲ訂正シテ初學讀書ノ
資トシテ簡便有用ノ書ナリ

詩學韻海

大典禪師著

全二冊

世ニ初學作詩ノ爲ニ設ルノ書多シトイヘ
韻字ヲ用ニルノ例ヲ悉ク論ジタルモノナシ
書ハ韻字ノ下ニ解ヲナシ又唐ノ元稹白居易
等ノ大家ノ集ヨリ長韻ノ詩ヲ格出シ古人
ノ雙的ヲモ載セタル是ニ據テ其用例ヲ搜
索セバ益アルヲ鮮ナカラス

童子通

山本蕉逸先生著

全一冊

此書訓點讀方ノ直ニテ覺工易キ方ヲ示シ
且言葉ノ端ニテ人ノ朝ヲ受ザル心得ノホカ
初學ノ用心盡シ漏スナシ

駱駝考

它山先生著

全一冊

歸正漫錄

安井真祐先生著

全一冊

宋明名儒數輩ノ佛老ノ害ヲ論セシテ諸
書ヨリ涉獵シテ記出ス異端ノ邪路ニ迷フ
者ヲ正シキ儒道ニ歸リ入ラシム

梧桐漫筆

錦城太田先生著

全二冊

先生平日隨筆割記ノ書也古今治乱ノ本
原ヲ推シ風俗汚隆ノ條ルヲ論シ博ク
經傳子史ヲ引テコトヲ証シ又學術ノ雅
正ヲ辨シ天人ノ秘蘊ヲ漏ス實ニ天下有
用ノ珍編ナリ

同後編

同上

全二冊

前編ニ漏レタル妙論ヲ載セ又經學詩文
ノ流派ヲ辨別シテ其精確ヲ極ム前編
同ク雙璧ノ書ナリ

同三編

同上

全二冊

向者刊行スル前後編四冊盛ニ世ニ行ハ
校裝本日ニ給服無ニ至ル今此三編ハ前後編
瀟々ル奇事現説ヲ緝合シ仍其外ニ舊聞
雜シ古人未發ノ新得ヲ提示シ家塾ノ誦讀
勿論旁ヲ博聞ノ資ヲ詩文學習ノ秘訣ヲ揭
都合六冊ヲ以テ全函ニ鴻寶トス

龍背發秘

太田錦城先生著 荒井亮氏先生校

全三冊

春雪解話

荒井亮氏先生著

全二冊

此書ハ家相ノ蘊奥ヲ著ハシテ衆人ノ為ニ福利ヲ導ク妙訣ナリ古ヨリ此類ノ書數種アリテ生起旺衰ノ事ヲ載ルモ雖モ元此事ハ易理ニ出テ聖人ノ人ニ教テ害ヲ避ケ利ニ就キ凶ヲ遠テ吉ニ趨ク一端ナリヲ言ハズ今此編ハ專ラ漢土ニ云家相ノ周易ニ原ヅキ黃帝ノ宅經梁ノ簡文ノ竈經ナドノ秘ヲ探リタレバ古ヨリ傳ル家相ノ諸書ト互ニ發明スル処アリテ家相ノ理ヲ窮ムル必讀ノ書ナリ

龍背師傳圖說

太田錦城先生直傳 堯民先生著

全三冊

此書ハ家造ノ形相地面ノ張欠等ヲ画圖ニ顯シ圖毎ニ口傳ヲ述テ住人ノ盛衰元ヨリ妻孥子孫之幸不幸親子ノ間ニ故障アル片輪ナル子孫出生スルノ下人等ニ不慮ナル者是アル一大家ニ崇ルカ劍ヲ所持ナス一又火難水難病難色難盜難等ニ至マデ眼前ニ知得ルノ妙訣ナリ一覽シテ其虛ナラザルヲ知玉フベシ

思貽空管城二譜

廣澤先生著 文峯先生校

全一冊

此書ハ廣澤先生嘗テ和華ノ製用ニ當ラズ唐華ノ善ニ及ハザルヲ憾ニ慕ラ唐式ニ據リテ手ツカラ細筆巨筆ヲ製造シ自ラ試ル一久クシテ其説ヲ委ク録シ又各圖式ヲ作リテ遂ニ此一書ヲ著セリ洵ニ藝林ノ闕典ヲ補フ書ト云ベシ

胸中山

全一冊

龜田鵬齋先生ノ画譜ナリ大儒ノ戲墨実ニ神出鬼没變幻ノ奇ヲキハム

緇林年芳

近刻

全三冊

此書ハ世尊ノ降誕涅槃ヲハシテ和漢佛寺ノ始佛像ノ傳來或ハ經卷ノ翻譯佛法ノ奇異或ハ石勒ノ佛圖澄ヲ信シ建摩ノ梁武帝ニ見ヘ或ハ百濟ノ曇慧我朝ノ來リ空海ノ唐ニ入ル等事而咸ニ石リ日蓮ノ一宗ヲ弘ル等事實百餘後漢ノ明帝ニ起リ我天保年間マデ干支ヲ符シ紀元ヲ掲ケ和漢ノ書數十部ヲ以テ其下ニ抄録シ志ク小傳ヲ記載シタレバ和漢印度高僧ノ年數ヲ探リ履歷顛末ヲ索ルニ甚便利ノ書ナリ

遊仙屈抄

唐張文成作 學士伊時點

全五冊

本邦ニテ中華ノ小説ヲ譯解スルハ此書ノ以テ始祖トス嵯峨天皇ノ時學士伊時ナルモノ神仙ノ訣ヲ得テコレヲ解ストイハリ小説家必讀ノ書ナリ

譯解笑林廣記

遊戲主人纂輯 一濠道人譯解

全二冊

コレハ漢土ノオトシハナニシテ面白キコトカギリナキ書ナリ俗語バカリニテ讀ムキニ今和訳註釋ヲ加ヘ誰ニテモヨククナセリ時俗語ノ小説ヲヨク習ハントスルニハ漢土ノ人情ヲ知ラザレバ解スル能ハズ此書ハオカナルヲ悉ク漏サズアル故ニヨク人情俗態ニ達スルニ妙ナリ故ニ俗語ヲヨム人ノ捷徑ニシテ關ベカラザル書ナリ

梧坡教諭

錦城先生附言 堯民先生著

全二冊

世教勸戒ノ意ヲ主トシテ旁ラ故事古書ヲ引テ證明シタル梧念漫筆ニ類シテ又別ニ捷徑ヲ開キタル珍書ナリ

談鋒資銳

堯民荒井先生著

全二冊

此書ハ平日錦城先生ニ聞ク処及ビ後世隨筆中論スル処ヲ劄記シテ學者博識ノ資トス又小説ノ奇事奇談等載タルハ大ニ看ルルヲ悦ハシム

近代著述目録 横本

全五冊

同後編 玉巖堂主人輯 同近刺

全五冊

慶長年間ヨリ天保ノ今ニ至ルマデ其道ニ名アル人ノ著述ヲ收載シ通編イロハ四十七音ヘ其姓氏ヲ排列セリイ部ハ伊藤仁齋伊勢貞丈ト表シ其下ニ書目ヲ舉タリ近世目録ノ書頗ル多シトイヘ皆板行セル者ノミヲ載テ諸家ノ深秘寫本ヲ以テ世ニ孤行セル者ヲ記スルコトナシ此書ハ珍卷奇冊人ノ聞見ニ及ハサル者ヲモ探索シテ遺スナシ只書目ヲ知ノミナラス諸家ノ姓名字號俗稱號貫等ヲモ詳ニ附シタレ其小傳ノ用ニ充ルニ足リ雲顧ノ君子一木ヲ架上ニ貯エニ過讀シ五ハ更ニ博識ノ一助トナルベシ

掌中書名便覽

高井蘭先生著 全一冊

上ハ六經ヨリ下ハ稗史ニ至ルマデ其月ヲ掲ゲ一見シテ益アルヲ夥シ

唐土歷代著述目録 玉巖堂主人著 横本近刺 全廿冊

此書ハ初メニ御製ノ書目ヲ舉ゲ次ニ歷代名家ノ著述聖賢ノ經傳ヨリ諸子百家ノ書演義小説ノ類ニ至ルマデ悉ク收録シイロハ四十七音ヘ其姓氏ヲ配入シ前後新舊ノ次序ヲ分テ其下ニ書目ヲ舉ゲ索檢ニ便ナラシム讀書家一本ヲ貯ヘ披閱シ五ハ多クノ利益ヲ得ベシ

朱子家訓經典餘師 齊田先生著 全一冊

此書南宋ノ名儒朱子平生子弟ヲ導キ教ラレシ家訓ニメ人倫ノ道ヲ明ニシ五常ノ理ヲ述ラレシニ身ヲ脩家ヲ齊ル最ノ書ナリ故ニ今國字ヲ以テ審ニ和鮮シタルナリ

朱子年譜略 高宮由章著 全一紙

朱子訓子狀 高宮由章著 全一冊

西銘 附東銘 全一冊

産科發蒙

片倉元周先生著

全四冊

此書ハ妊娠中ノ諸症臨産ノ經驗治方ヲ悉ク舉ゲ且産論翼ノ備ハラザルヲ補ヒ萬古以來醫書ニコレナキ所ヲ發明シ又阿蘭陀難産ノ圖二十七ヲ翻譯シテ審ニ示シ且家秘ノ妙方ヲアラハシタレ其治療ニ益アルヲ舉テ數フスカラス醫ヲ業トスルモノ一日モ此書ナクンバアルベカラズ

徽癘新書

片倉元周先生著

全二冊

此書ハ古ヨリ難治ノ癘病ヲ先生燒針ヲ刺シ斑猫ヲ以テ毒ヲ去ル事ヲ發明シ千古以來コレ無キ治術ヲ萬世ニ傳ルナリ又梅毒ノ治法此書ヲ能ク反覆シテ讀トキハ如何ナル難症ニテモ治セザルハナシ實ニ天下第一ノ奇書ナリ

靜儉堂治驗

同上

全三冊

此書ハ先生數十年來ノ治驗百中ノ一ヲシルシ置レタルヲ集メラレタルナリ病者ノ姓名住所前醫ノ治方又ハ自己ノ與ヘタル劑ノ効アル効ナキヲ包ムナクカレ又麻疹ノ經驗方肝症ノ治方並ニ弟子大森氏ノ治効十餘條ヲ記シ又衆醫ノ治スルヲ能ハザル奇疾ヲ治シタル等國字ヲ以テ書レタレ實ニ後進有益書ナリ

傷寒啓微

同上

全三冊

此書ハ傷寒論ノ諸註家未ダ言ハザル所ノ奧義ヲ發シ癘瘧ト傷寒ト同病トシ且傷寒金匱二書ノ方ニテ癘瘧トシラサル所ノ治方ヲ唐宋以來ノ醫書ニ探ヒ又經驗スルトコロノ新定十七方並ニ十障丸ノ方ヲアゲテ治療ノ妙トシ今治療ニ其益甚多クシテ人ヲ濟フニ深切ナル書ナリソノ新定スル所ノ諸方又死症ヲ發明スル妙處ニイタリテハ實ニ仲景ノ羽翼ト謂ベシ

玉巖堂主人著

玉巖堂主人著

青囊瑣探

片倉元周先生著

全二冊

此書ハ先生ノ漫筆ニシテ人ノ戒トナリ又初
堂ニ學業ヲ勸メ人情ノ免レサル所ヲ記シ
且奇効アレ秘方並ニ甲斐ノ徳本ノ經驗
十九方ノ主治藥方ヲ舉ク醫家ノ重寶
ナル書ニシテ又俗家ニテモ是ヲ讀トキハ
發憤シテ壯年ノ益トナル多シ

瘍科秘録

東軒本間先生著

全十冊

華岡翁ノ遺教ヲ述又先生ノ自ラ發明
スル所ノ術ヲカヘ瘍科ノ治法ヲ論ズル
書ナリ初ニ病名ヲ正シ病因ヲ論ズル
ニ脈證ヲ説キ瘡瘍ノ變正輕重死生等
ヲ詳ニス終ニ禁方秘術ヲ載セ實ニ瘍
科ノ全書ナリ此書ヲ熟讀シテ治瘡
ヲ施ス寸ハ起死回生ノ功ヲ立所ニ成
ス

痘疹不求人方論

明朱隆子著

全一冊

此書ハ痘疹ノ病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ

歷代名醫一覽

雉門先生著

全一冊

九散方機

小本

全一冊

此書ハ東洞先生ノ作ニテ金匱傷寒ノ方ニ機變
妙用アルヲ記セリ是先生常用ノ方劑ニシテ
臨病機變活用ノ書ニツキタリ且九散兼用ノ
法ヲ載セタル大二幼學治療ノ益トナルベシ

秘傳重寶記

西面指

折本

此書ハ痘疹ノ病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ

簡易養生記

沼悟窓先生著

全一冊

此書ハ養生ノ法ヲ述ベテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ

書學大概

神通北海先生著

全一冊

此書ハ執筆ノ法ヲ正シ古人ノ論說ヲ
リテ舉テ研究ナシ明ニ解シタレハ和漢
古今書法ノ必用ナリ

舊蹟紀聞

立網法師著

全二冊

皇朝ノ事蹟ヲ考ヘ古語古書ヲ引証
テ國學ノ一助トス

三餘叢談

柳屋主人著

全二冊

皇朝ノ國史或古語古書ヲ引証
テ三餘ノ暇ニ讀ムニ宜シク考索
トシ奇冊アリ

翁野さし記行

成美大人抄

全一冊

翁野十一景ノ事ヲ記シ
翁野十一景ノ事ヲ記シ
翁野十一景ノ事ヲ記シ
翁野十一景ノ事ヲ記シ

近世名家書画談

安西雲煙著

全二冊

此書ハ近世名家ノ書画ヲ論ズル
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ

同二編

同上

全四冊

此書ハ近世名家ノ書画ヲ論ズル
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ
法簡易急平の病者ヲ救フ方ニシテ

東江先生書話 全三冊

我邦晉唐法書ニ根據シテ書學ニ變
セルモノハ先生ヲ以テ祖師トナシ此書ハ
諸家隨筆中ヨリ古名人ノ墨蹟ニ關ル
一ヲ考索シテ學書ノ人博識ヲ資ス
實ニ有用ノ珍編ナリ

月儀帖 東里先生書 全一冊

五體雲淡帖 星池先生書 全一冊

扇面清風帖 清人集書 全一冊

玉屑帖 星池先生書 全一冊

和漢對照書札 初編 全二冊

清朝ノ當時應用ノ書牘ヲ和文ノ書簡
ニ翻譯シタレバ學問ノ一益ニシテ且ツ星
池氏ノ書ノ適美ナルヲ嘆賞スベシ

孫過庭書譜 草書 全一冊

東坡大江東帖 草書 全一冊

米元章主家帖 行書 全一冊

趙子昂大湖帖 行書 全一冊

董其昌衆鳥帖 行書 全一冊

董其昌登龍帖 草書 全一冊

古今名蹟墨寶帖 正面 全一冊

上古三蹟ヨリ或ハ源平諸將以來武家
或ハ逸人名臣僧家ニ名アル人ノ真蹟ヲ
刻シタレバ上古ヲミタフ君子ノ机上ニ必
アルベキ書ナリ

品物名數抄 松澤老泉著 全一冊

農家調寶記 高井蘭山先生著 全三冊

此書ハ天竺開キ耕也云々由來ノ事
百姓家小おめて田時務の勅方也極
地を檢地中平貢取納算利子利子形
録也此文認方男女檢札の式ホの爲
いささか淺き記ナリ

農家用文章大全 同上 全一冊

用文章の書較多ありといふも此書
檢書などの返條書文の類或を極
ある文飾又ハ風流の程を成つてより
云ハ文章と云ふは今日極多き耕
作農具村邊白耕也の類小要用の文字
を多らみ年中定式條時法用の文云
了りたりをなすを極多き耕
家小蓋ねあき月利の調ををとい
くらこいふ小ハ組帳と加これ初書
教育便抄不抄の書書かれハ文章
待して用毎自在なす

農家調寶記附録 大藏水常著 全一冊

一名除煙録
此書ハ田小煙生ノたる時油と云々
おる子の紅方と云々記ノ且此儀の
油の傳煙の程を記す云々著
中あり此書と云々いささか浅き
いさか浅き記ナリ
此儀ハ且此儀小つらからず
ら小記一これ農家ハ必行一抄
云々

農家調寶記續録 同上 全一冊

一名豐穰録
此書ハ稻を刈て掛り
先者一上稻と云りて稻本小掛
ハ葉の程を記す云々記ノ且此儀の
多し儀を記す云々記ノ且此儀の
減り儀を記す云々記ノ且此儀の
あり云々記ノ且此儀の

増補 年中用文大成 臨泉堂先生筆 全一冊

増補 紅梅用文章 同筆 全一冊

増補 女諸用文章 御家橋正敬筆 全一冊

増補 女諸用文章 御家橋正敬筆 全一冊

塵劫記 十露盤獨稽古 山本三三著 全一冊

子孫繁昌記 手島堵菴著 全一冊

家業相続力神 土屋巨積著 全一冊

墨河八景帖 御家攀雲堂著 全一冊

長雄書札文集 船田耕山著 全一冊

通俗用文章 全一冊

墨河八景帖 御家攀雲堂著 全一冊

長雄書札文集 船田耕山著 全一冊

通俗用文章 全一冊

通俗用文章 全一冊

經典 弟子職 漢百年先生著 全一冊

經典 實語教童子教證註 振鷺亭著 全一冊

經典 古狀揃證註 鳥井蘭山翁著 全一冊

經典 御成敗式目證註 同上 全一冊

經典 菅家文章 高井蘭山注 全一冊

日本國郡附 西面周 一紙

古錢鑑價附 全一冊

泰平年代記 西面摺 全一冊

今川童蒙解 全三冊

今川童蒙解 全三冊

今川童蒙解 全三冊

大橋先生手簡	全一帖	御成敗式目頭書繪抄	全一冊
蓮池堂任槐帖	全一冊	同假名附	全一冊
長雄女今川	全一冊	同抄	全一冊
女今川千代見種	全一冊	庭訓往來無點	全一冊
實語教童子教	全一冊	弘文庭訓往來	全一冊
同頭書兩點	全一冊	教牘庭訓往來寶文房	全一冊
古狀揃萬寶藏	全一冊		
文貨舌狀揃	全一冊		
古狀揃講釈	全一冊		
泰平江戸往來	全一冊		

朝川鼎著

嘉永三年庚戌七月

京都三茶通升屋町 出雲寺文次郎
 大坂心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
 江戸日本橋通二丁目 須原屋茂兵衛
 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛
 同所 須原屋新兵衛
 芝神明前 岡田屋嘉七
 淺草茅町二丁目 須原屋伊八
 本石町十軒店 英屋大助
 横山町三丁目 和泉屋金右衛門

發兌書林

